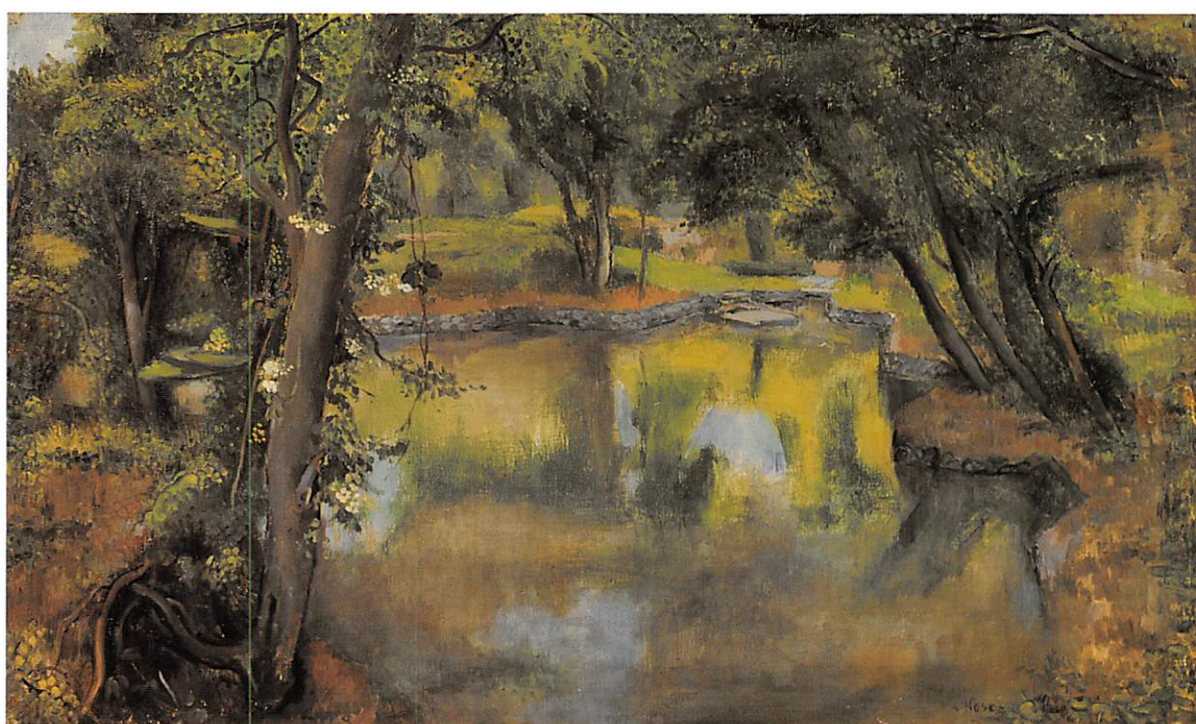


アルテピア

社団法人 北海道美術館協力会

札幌市中央区北2条西17丁目 TEL・FAX 011-644-4025



能勢眞美「緑庭」

1930年 油彩・キャンヴァス 95.3×160.8cm (北海道立近代美術館蔵)

うっそうと木々が生い茂る庭。北大植物園の北側に隣接する伊藤邸を描いたものである。横長の画面の大部分を覆う緑は、無限のヴァリエーションをもち、たがいに響きあっている。中央の池に映る木々の間には青空の色がのぞいており、上方へのすがすがしい広がりを与えている。

作者・能勢眞美は、大正末頃からさまざまな絵画グループの組織に関わったり、道展に創立会員として参加するなど、北海道画壇を牽引する役割を担ってきた画家である。眼鏡店の主人でもある彼は、朝8時半から夜9時まで店を働く。しかし画友が訪ねてくれば店先に画談の花が咲き、客がないときは店の奥でシャ

ツ一枚になって筆をふるう画家の姿があった。朝5時に起床し、写生には開店前の時間をあてた。

当時画壇には海外から新傾向の画風が流入して大きな影響力をもち、そのためにいわゆる難解な絵画が注目を浴びようになっていたが、能勢の制作は、この自然の素直な表現である「緑庭」からもわかるように、そうした風潮とは無縁であった。「傾向やイズムなど難しいことは好みません。ただ気の向くままに描くことのみ」と我が道を行く能勢は、道展に「緑庭」他2点を出品して長官賞を受賞。そして同作品が見事第11回帝展入選を果たした時、この道展代表選手の中央での快挙を祝う画友で、狭い眼鏡店はいっぱいになった。

美術館と地域と協力会と

みんなで拓くミュージオロジー

道立近代美術館副館長 奥岡茂雄



ミュージオロジーは「オロオロ」、ミュージオグラフィは「グラグラ」。こんな言い回しが私たち芸員の間でひんぱんに交わされた時期があった。全国的な公立美術館建設ラッシュ

の頃で、いまから二〇年ほど前でなかったかと思う。

とかくタテモノの立派さばかりが前面に出て、肝心の運営理念やその実現のための具体的な方法論、また技術論などの肝心のソフト面が一向に見えてこない風潮を揶揄してのことだった。ほかにも同じような意味で「仏つくって魂入れず」と表現する人たちも多かった。

「カタマル」ミュージオロジー

一般にはまだまだなじみ

が薄い、ミュージオロジーとは博物館学を総称する用語。博物館の一形態である美術館にしてみれば美術館学と読み替えて差し支えないもので、館活動の方向を決定つける際の基礎となるのがこれだ。そしてこの総称としてのミュージオロジーを二つの領域に分けて整理する考え方があり、それがミュージオロジーとミュージオグラフィというわけである。

そもそも美術館とはなにか。どんな歴史をたどり現在の姿になったのか。またこれからの美術館のあるべき姿は、などなど、主として理念的課題を思い考えるのがミュージオロジー。対してミュージオグラフィは、このミュージオロジーによって導き出された理念の実現に向けて、方法的課題や技術的課題を追求、また解決に至らせるものといえる。

べきものが、いつの場合も「オロオロ」したり「グラグラ」していいわけがない。幸いにしてさすがに近年は、そこまで頼りない美術館はぐんと減ったようではある。が、では全く問題がなくなっただかとなると話は別だ。

その端的な例が開館時に立ち上げた理念や方法をただひたすら守るだけで、いつの間にか、外から眺めたら「唯我独尊」ないしは「聖域」然と化しているかに映る美術館だろう。つまりはミュージオロジーの硬化であり、「オロオロ」「グラグラ」にも匹敵する危機的な「カタマル」状態といつてよい。そしていうまでもないことだが、こうした例はいずれこの美術館にとっても決して他人事でないのである。

れば当然、地域のニーズの中身も変わり、それに呼応するべく美術館の役割も変わってくる。したがってそうした創造的な変容のプロセスそのものが、長いスパンでとらえたとき美術館の進化ということになる。そう、美術館にとっての地域とは、生物の世界というゲノム（いわば生命の設計図）にも相当する、最も重要かつ基礎となるものなのだ。

新たな世紀を迎えたいからこそ、こうした美術館と地域の緊密な関係をミュージオロジーの根幹にきちんと据え直し、地域とともに地域ならではのミュージオロジーを新たに拓くべきだろう、と私は思う。そしてそのための美術館のスタンスとして、私は「地域に開き、地域を拓く」美術館というのがそれにふさわしいのではないかと考えている。

「カタマル」弊を寄せつけない、地域における時代の生命の風をいっばいにはらんだ、いつも「イキイキ」

三岸好太郎賞 三岸節子賞

……授賞式から……



三岸好太郎賞／永野曜一「空知野」

全国から四九五点の作品が寄せられた三岸好太郎・三岸節子賞の公募は昨年の四月に開始、スライドによる第一次審査と実作品の第二次審査により三〇点の作品が入選しました。

道内・道外の応募の比率は半々であり、年齢は十八歳から八十二歳と幅広い層からの応募がありました。

いずれの作品もレベルが高かったが、その中から三岸好太郎賞には永野曜一氏

の「空知野」、三岸節子賞には盛本学史氏の「チグリ」が選ばれました。

一月二十七日には三岸好太郎美術館で授賞式が行われ他の二八点の入選作品と、三岸好太郎の二〇点・三岸節子の一点の作品とともに展示され、多くの来館者を楽しませました。

「絵を描いていてよかった、今後も描



三岸節子賞／盛本学史「チグリ」

いていきたい」と永野氏、「これからも力を尽くしていい作品を、勉強して、いい作家になる努力をしたい」と盛本氏は語っていました。

感あふれる美術館である。

協力会との関係を軸として

「地域は美術館の〈ゲノム〉」。「地域に開き、地域を拓く」。もっとも一口に地域といっても、その構造は複合的・動態的であり、美術館に対するニーズを的確に把握するのは容易ではない。ただ北海道には美術館にとって地域の風向きをとらえるうえで恰好の、歴史と実績を誇る「北海道美術館協力会」がある。

そういえば当館が開館してまもなくの頃、協力会の人たちは「美術館あつての協力会」といういい方をよくされていたことを思い出す。「協力会」という名称が無意識のうちにそういわせたのかどうか定かでないが、その言葉を耳にした時、私たち美術館の人間も別段違和感を感じることもなく受け入れていたように記憶する。

相互共生を時代精神とするいまは違う。むしろその

並びでいうなら「協力会あつての美術館」となろう。利用者や支持者なくしては美術館の継続も進化もあり得ないからだ。むろんそれだけでない。当初は半日常的だった会員諸氏の美術館利用が、年々徐々にではあっても着実に日常的利用に転じている事実は、「地域に開き、地域を拓く」美術館に向かうプロセスの一端を示すものだろう。

さらにもうひとつ触れておきたいのが、この協力会

を母体とするボランティアの人たちの「イキイキ」パワーである。全部で七部という広範な業務をそれぞれに分担してこなす旺盛な活動ぶりには、私はまだ他館にその例を知らない。いずれの部活動も熟成のうえに適宜活性化がはかられその充実ぶりは目を見張らせるものがある。地域に積極的に進出してゆく、いわゆるアートマネージメント活動もいよいよ軌道に乗ってきた。

美術館と地域に対する正しい愛情と自らの「生きがい」をびったり重ね合わせ、真摯にことに当たる姿に、私は一人の学芸員としてずいぶんと教えられた気がする。育てられた気がする。

とりもなおさず地域における生命の風の最も鮮明な相（すがた）であり、そこに新たなミュージオロジー構築への確かな手応えを私は強く感じるのである。

近代美術館

エジプト展

神・人・自然 ナイルが育んだ古代の美

四月二一日(土)～七月一日(日)

古代エジプト文明は、紀元前三〇〇〇年頃、豊かな水や肥沃な大地など、ナイル川がもたらす大いなる恵みによって花開きました。自然界のさまざまな現象に神を見、来世での復活再生を信じたエジプトの人々は、巨大なピラミッドや壮麗な神殿を造り、そこに色鮮やかな絵画やレリーフ、彫像や道具、装飾品などを副葬しました。これ



ブスエンス1世の黄金のマスク
第3中間期第21王朝時代(1070-945B.C.)

ら副葬品の数々から当時の人々の生活や精神世界をかいま見ることができただけでなく、その美しい造形からは、古代エジプト人たちの卓越した美的感覚もうかがい知ることが出来ます。本展は、カイロ博物館の至宝《ブスエンス1世の黄金のマスク》をはじめ、日本初公開作品を含む七五点の作品により、この栄光に包まれた古代エジプトの美の世界を紹介するものです。

三岸好太郎美術館

全国美術館会議小規模館

ワーキンググループ共同企画展

個人美術館散歩 7人の洋画家

久米桂一郎・熊谷守一・萬鉄五郎・東郷青児・荻須高德・三岸好太郎・小磯良平

五月二五日(金)～七月八日(日)

現在、各地にその土地ゆかりの作家の記念館が開館し、個々の作家を顕彰するとともにその土地の歴史をみなおす場となっています。今回の展覧会は、日本近代洋画家の記念館や記念室をもつ美術館七館の共同企画で、その所蔵品を一堂に集めて紹介するものです。明治の洋画導入期に活躍した久米桂一郎、あたたかみのある素朴な作風に



小磯良平 K夫人像 1947年
神戸市小磯記念美術館

ファンの多い熊谷守一、新しい美人画を生み出した東郷青児、パリを描いた荻須高德、革新を求めた萬鉄五郎、三岸好太郎、優雅な婦人像で親しまれた小磯良平。七人の画家は、活躍した時代も個性も異なり、これまでこのようなかたちで一緒に紹介されたことはありません。今回の展覧会では七作家七五点を展示し、それぞれの美術館に足を運ばなければみることでできない画家の作品世界を紹介します。この機会に多くの方が、作家とその美術館に関心を寄せていただければと考えます。

旭川美術館

自然とともに生きる絵本作家

ターシャ・テューダーの世界

六月二日(土)～七月一日(日)

アメリカの著名な絵本作家ターシャ・テューダー(一九一四年ボストン生まれ)の芸術や生活を総合的に紹介する展覧会です。彼女は、一九七七年に『コーギベルの村まつり』で、絵本作家として認められ、それ以来八〇冊以上の本を出版しています。現在、アメリカ北東部、バーモント州の広大な敷地のある一八世紀の農家を模した家に一人で住み、ガーデニングを楽しみながら、日用品を手作りして、昔ながら



ターシャ・テューダー
絵本『輝きの季節』より

のシンプルな生活を続けていることでもよく知られています。本展は、日本で初めて彼女の世界を紹介するもので、絵本の世界、彼女の暮らしぶり、ガーデニングの三つを柱に、彼女の生き方である「自然との調和」を体感できる内容となっています。出品作品は、絵本の原画(水彩)六九展、挿絵、出版物、ドールハウス、暮らしの用具、ガーデンの写真などで構成され、彼女の世界を知るまたとない良い機会となるでしょう。

函館美術館

シルヴァーノ・ロティ・コレクション

イタリア静物画展

七月二九日(日)～九月九日(日)

今年の三月から幕を開けた「日本におけるイタリア年」にちなみ、イタリア美術の精髓を紹介します。今回とりに上げるのは、時代を超えて美術家、そして美術愛好家たちを魅了してきた静物画です。もともと、歴史画、宗教画、肖像画などの一部として描かれてきた静物画は、イタリアの一六世紀後半に、独立したジャンルとして確立されました。その後、象徴性、科学性、あるい



ジョルジオ・モランディ「静物」1948年

は哲学的な含蓄など様々な意味合いを込めながら多様な展開を見せ、さらに現代にいたっては、豊かな発想と大胆な表現により、新しい静物画が生まれています。本展では、その誕生から現代までのイタリア静物画四〇〇年にわたる変遷を、伝カラヴァッジョ、イタリアのフェルメールと呼ばれるバスケニス、メレンデス、モランド、ディ、コなど巨匠たちの作品約八〇点によりたどりまします。

帯広美術館

アレクサンダー・カルダー展

五月二二日(火)～六月一七日(日)

二〇世紀アメリカが生んだ現代美術の巨匠アレクサンダー・カルダー(一八九八～一九七六)。彼は、彫刻作品に動きを取り入れた「モビール」や、面と曲線を巧みに組合わせ躍動的な空間を創出した「スタビル」などにより、それまでない斬新な彫刻の概念を確立しました。

一方、そのユーモア溢れる芸術性と卓越した造形感覚は、彫刻にとどまらず、玩具、ジュエリー、舞台装置さら

には飛行機やスポーツカーの装飾にいたる幅広い分野に繰り広げられ、多様な様相を示しています。

本展では、代表的なモビールやスタビルをはじめ、針金彫刻、ブロンズ彫刻、油彩、素描、玩具、ジュエリーなど、多彩な作品およそ七〇点を一堂に紹介します。



カルダー「くねくね」1970年

今世紀の美術に革新をもたらしたカルダー芸術の全貌を概観する展覧会です。

釧路芸術館

風景の向こうに

山、森、湖、大地の深奥

～遠い(ゆ)だま)はるかな静寂(しじま)～

四月二八日(土)～六月一〇日(日)

自然の風景は複雑多様な表情を織り成し、その奥深い様相は人々に畏怖や憧憬の念をも抱かせ、美術の大きな主題としてあらわされてきました。物言わぬ自然の静寂の中にはるかな声(こえ)や(ゆ)だま)を聴き、景観の奥に想いを馳せて生み出されたすぐれた美術作品に見る風景は、表層的な描写にとどまることなく、崇高さや象徴性をも秘めた、自然の峻厳・神秘的な美

世界として立ちあらわれます。それはまた、時に美術家の心の内奥に潜む風景としても描き出されるものでもあるでしょう。

本展では、北方の景観を中心に、深い山々や森、湖沼、滝、大地などの風景を題材とした日本画、油彩画、版画、彫刻など、心象や抽象も含めた約五〇点の秀作を紹介します。そこにあらわれた自然の深遠さや



岩橋英遠「北の山たち(院雲のトムラウシ)」1986年

然の深遠さや崇高さ、厳粛さ、そして神秘的や幻想性などを探るとともに、それぞれの作家の個性的表現と自然への想いをご覧ください。

芸術の森美術館

札幌芸術の森一五周年記念

砂澤ビッキ展

六月三日(日)～七月一五日(日)

旭川出身の彫刻家砂澤ビッキ(一九三一～一九八九)は、札幌芸術の森野外美術館蔵の《四つの風》(一九八六)など、木を素材とするスケールの大きな抽象彫刻で知られます。木との対話、格闘から生まれるその作品は、自己と自然との親和、あるいは自然の靈気を感じ取るうとする姿勢を強く感じさせます。二〇世紀の造形語法を消化しながら、出自であるアイヌ民族の自然観・

世界観に裏打ちされたビッキの制作活動は、ダイナミックに、時に繊細に木の特性を引き出しながら、最晩年まで意欲的に続けられました。

本展ではビッキが豊かな森林に囲まれた道北の音威子府村に移り住んで以後の制作に焦点をあて、抽象作品をはじめ、昆虫や鳥などをモチーフとした繊細な立体作品や素描、さらに実際に制作に使用された道具などの資料もあわせて展示し、砂澤ビッキの豊かな造形世界を紹介します。(六月二四日に関連シンポジウム開催)



砂澤ビッキ「鳥碑-1」1982年

札幌彫刻美術館

平成十三年度前期収蔵品展

本郷 新の「母子像・キリスト像」

三月三一日(土)～八月五日(日)

当美術館収蔵の母子像とキリスト像の彫刻・絵画を展示します。

母子像は、時代や国、文化に関係なく、芸術の永遠のテーマです。

本郷 新も、生涯を通じて母子像を制作しています。初期の作品は、一九三六年三二歳の時に制作した「母子像」です。そして、最期の「遙かなる母子像」(一九七九年)までブロンズ、木、テラコッタの素材による一八点の作品があります。

広島市の「嵐の中の母子像」(平和公園)など野外彫刻になった作品もあります。

記念館では、晩年病床で描いたキリスト磔刑図のデッサンを展示します。

不治の病に冒され、彫刻制作が困難になった晩年、三五歳から制作していなかったキリスト像に取組みます。病床で死と対峙しながら描いたものです。

彫刻にはいたらなかったキリストのデッサンは、本郷が残した最期のメッセージかもしれません。



本郷 新「顔のない母子像」1978年

MUSEUM CALENDAR

2001. 4月～10月

美術館の特別展覧会ご案内

※貸館の場合は、会員証は使えません

	4	5	6	7	8	9	10
近代美術館	貸館 4/21～7/1 エジプト展 神・人・自然－ナイルが育んだ古代の美				7/14～8/26 朝鮮王朝の美	貸館 9/14～10/21 平山郁夫展	
三岸好太郎	4/1～5/20 所蔵品展（第1期） モダニストの軌跡		5/25～7/8 個人美術館散歩 7人の洋画家		7/13～9/2 所蔵品展（第2期） アトリエへの夢		9/7～11/11 二人の野獣 里見勝蔵と三岸好太郎
旭川	4/13～5/27 オーストラリア・アポリジニの美術 〈ドリームタイム〉へのいざない		6/2～7/1 自然とともに生きる絵本作家 ターシャ・テューターの世界		7/7～8/26 ティンガティンガ展 現代アフリカのポップアート(仮称)	9/1～10/14 追憶・旭川の作家たち	10/20～12/9 人間国宝の世界展
函館	4/15～5/27 さようなら20世紀 カメラがとらえた日本の100年		6/5～7/22 日本の美とところ 桃山から近代・絢爛たる500年の粋		7/29～9/9 イタリア静物画展 シルヴィーノ・ローディ・コレクション		9/19～11/11 朝鮮王朝時代の美 男の部屋・女の部屋
帯広	4/6～5/16 帯広美術館コレクション選集 道東の美術 ヨーロッパのポスター	5/22～6/17 アレクサンダー・カルダー展	貸館		7/13～9/5 中国美術の精華 台北・鴻禧美術館所蔵品展		9/14～10/24 2001年シネマ・オデッセイ 映画ポスターの20世紀
釧路	4/1～4/18 釧路芸術館 所蔵品展	4/28～6/10 風景の向こうに －山、森、湖、大地の深奥 遠い野(こだま)・はるかな静寂(しじま)		6/23～7/22 日本画にみる四季の美 大観・香草から現代作家まで 高崎タケ美術館所蔵		7/29～9/24 アートごちそう帖 美味・滋味・妙味・奇味 …さあ、召し上かれ	10/6～12/4 MOZUNA KIKO/ 毛織物展 記憶術としての空間
札幌彫刻		3/31～8/5 本郷 新の母子像 キリスト像（記念館・11/4まで）				8/10～9/24 開館20周年記念展 本郷 新とゆかりの作家たち	9/28～11/4 第10回 本郷賞受賞記念展
札幌芸術の森	4/1～5/27 四谷シモン 人形愛		6/3～7/15 札幌芸術の森15周年記念 砂澤ビッキ展		7/21～9/2 ポラロイド・コレクション アメリカ写真の世紀		9/8～10/23 札幌芸術の森15周年記念 東京富士美術館所蔵 西洋絵画名品展

～古代エジプトから21世紀に送るメッセージ～

エジプト展 神・人・自然－ナイルが育んだ古代の美

5000年の時を越え今よみがえる
生活と精神世界を日本初公開の作品を含む75点で紹介

・2001年4月21日(土)～7月1日(日)

〈休館日は毎週月曜日；ただし4/30は開館〉

開館時間＝9：30～17：00（入場は16：30まで）

・道立近代美術館

札幌市中央区北1条西17丁目

地下鉄東西線〔西18丁目駅〕より徒歩5分

エジプト展ご案内 ◇テレフォンサービス Tel 011-218-5311 ◇ホームページ <http://www.nhk.or.jp/sapporo/>



藤野 進一

浦田さん エンゲル係数がとても高かった昔浦田さんはソバでもどうかと誘ってくれ必ず画廊を覗いて帰った。有難かった。勿論ソバがである。ある日絵はどう見るのかと尋ねたら沢山見れば分かるとの答。以後画廊覗き癖が移り穴場も発見。帰郷や上京の折必ず通る大手町三の丸尚蔵館に奈良平安から現代の文化勲章作家まで通年無料公開の皇室所蔵宝の



大中 富紗子

美を旅して 窓辺の小鳥のさえずり、レンガ色の暖かい屋根、白い壁、街を行く軽やかな蹄の響、教会の澄んだ鐘の音、皆々ゆったりと時を刻む、ここは中世・・・〈旅日記から〉

「美の探訪」も終わりに近づいたブルージューのホテルでの思い出です。オランダ、ベルギーの主要な美術館を巡り、偉大な画家たちの多くの作品に触れ胸いっぱいになり、私も芸

山。初め皇宮警察のチェックを受けるので図々しく入る勇氣がいる。浦田さんは初中海外美術館ツアーをし折々寄って私が本でしか知らない本物の絵や建物の話をしていく。ソバも嬉しいが近年その事も待ち遠しく楽しく聞けるようになった。浦田式鑑賞法の成果で私なりに人生に巾ができた事とても感謝している。そうそうあの方も風景画を描いている。何時でも、誰でも胃にもたれず腹の中にほうり込める和食系庶民派の立ち喰いソバのような絵である。と言ったら怒られるのかな。

術家になったような気持ちに浸りました。先日、札幌芸術の森に「中根邸の画家たち」の展覧会に行きました。戦中から戦後の厳しい時代のなかで活動する画家たちの様子、これに私財を投じて支えた中根家の人々。このことを知った時、先人達の芸術への取組みのひたむきさに胸を打たれました。名画には画家を取り巻く人々の人生活様、また、当時の時代背景もふかく関わっていることを知り、たいへん参考となり思いを新たにしております。

新会員紹介

平成12年8月～平成13年3月
(敬称略)

―ご入会ありがとうございました―

- | | | | | | | | | | |
|-------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-----|
| 8 札幌市 | 子雪子 | 子美子 | 子美子 | 子美子 | 子美子 | 子美子 | 子美子 | 子美子 | 子美子 |
| 札幌市 | 和美好 | 三妙佳 | 真沙 | 百迪房 | 妙由真 | 真ひ佳 | 純嶺悦 | 智博美 | 惠子 |
| 札幌市 | 本藤田 | 郡山田津 | 田口野 | 村田橋 | 浦内森 | の木泉 | 澤田原 | 田原山 | |
| 札幌市 | 辻松 | 佐吉阿石 | 鎌夏 | 森野 | 草高宮 | 高勝松 | 川と佐小相 | 森永山 | |
| 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 |
| 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 | 札幌市 |

美術館協力会賞に
鈴木千尋さん

第四二回学生美術全道展
(全道美術協会・北海道新聞社主催)の最高賞である
全道美術協会賞・道美術館
協力会賞に、道浅井学園大
二年の、鈴木千尋さん(二
〇)の油彩「憧憬」が選ば
れた。

道内の大学・専門学校・
高専・高校・等から絵画・
版画・彫刻・工芸合せて四
五三の応募があった。
受賞した鈴木千尋さんは
「自らを表現するため、好
きな絵を描き続ける」と受
賞を喜んでいる。
副賞として「海外美術研
修旅行」が贈呈された。

一三年度協力会総会
日程決まる
二〇一一年
五月三〇日(水)
於 近代美術館講堂

美へのかけ橋

アルテピア会員募集

世界の art に出会える

アルテピアは美術館に協力し、美術の普及振興につとめる組織です

《会員特典》

- ・美術館主催の美術展無料鑑賞
道立〈近代、三岸好太郎、旭川、函館、帯広、釧路〉札幌〈彫刻、芸術の森〉
- ・上記美術館の情報サービス
- ・海外、国内美術探訪の旅への参加
- ・近美内の売店（図書・図録を除く）やレストランでの割引利用

年会費等詳細は北海道美術館協力会（アルテピア） 札幌市中央区北2条西17丁目 TEL・FAX 011-644-4025



近代美術館売店商品

編集 だより

もうすぐ四月とい
ますのに、「春は名
のみの風の寒さ……」
を思い起こす今日こ
の頃です。

そして、春はすべ
てのスタートの季節であり、また、
来し方を思う時期でもあります。

そのような時に、奥岡近代美術
館副館長へご寄稿をお願いしまし
たところ、ご快諾いただいた「美
術館と地域と協力会と」です。文
中の「相互共生を時代精神とする
いま」との言葉のように、美術館
協力会も新たなスタートの時期で
あるような気がいたします。

一三年度「美術講座」開催
毎年好評の美術館協力会と近代
美術館・三岸好太郎美術館共催の
「美術講座」ですが、一三年度は
四月一三日（金）から九月七日（金）
までの期間、全一六講座で開催さ
れます。近代美術館や三岸美術館
の主に学芸員による講義で、美術
文化についての知識と教養の向上
を図ります。受講希望者は一三九
名となっています。

ボランティア希望者にはこの他
に、ボランティア養成の基礎研修
を五回程度と専門研修が翌年三月
末まであります。